

北アルプス高山帯におけるライチョウ保護のための研究・活動

北アルプス高山帯環境保全研究会
丸田恵美子・上野 薫・大村顕介

I. 目的

ライチョウとその生存を支える高山生態系の保護は、日本列島の植生帯の多様性を維持するためにぜひとも必要である。しかし本州中部の高山帯に生息するライチョウは 2000 羽以下に減少しているといわれ、2012 年には絶滅危惧 IB 種に指定された。予想される気候温暖化に伴い、日本の気候や動植物の挙動が変化し、ライチョウの生息環境を劣化させる可能性がある。そこで、ライチョウの生息環境や生活史について長期的なモニタリングを行い、それに基づいたライチョウ保護のあり方を提示し、さらに自然愛好家や登山者との協力体制を確立することを目標としている。

II. 調査地と方法

北アルプス太郎兵衛平・上ノ岳を中心として、ライチョウの育雛行動を詳細に追跡調査するとともに、ハイマツ群落内に温度計とインターバルカメラを設置してライチョウの生育環境の長期モニタリングを開始した。

III. 結果と考察

2014 年 7 月、8 月に、ライチョウの親子の行動を追跡し、食餌や睡眠の様子を明らかにすることを試みた。日の出前から夕方に家族群が動

かなくなるまで追跡を続け、翌朝は同じ場所から活動開始するのを確認したので、完全にライチョウの活動を追跡できたものと考えられる。8 月の調査では、図 1 に示すように日の出(5:08)前の 4:20 から活動開始しており、日没(18:44)後の 19:00 まで活動していることが確認され、夜は活動しないことがほぼ確実となった。さらに、早朝の活動開始後と夕方の活動停止前には多量の採食を行っている(図 1)。これらの結果は、夜には何も食べていないことを示しており、夏は白夜の高緯度地方のライチョウに比べて、採食時間が雛の生存や成長に影響を与えており、特に悪天で朝夕の採食が制限される場合にはその影響は顕著であると考えられる。さらに、約 10 時間もの夜間休息が確認された 2 か所の植生の共通性として、構成種の 3/4 以上が草丈 30 cm 以上であり、被覆度の 3/4 以上をチシマザサが、1/4 をハイマツが占めることが分かり、安全な雛の成長には、これらを満たすような植生が保全される必要があるといえることができる。

次にライチョウ雛の餌となる植物の開葉時期を決めている環境要因を明らかにするために、ハイマツ群落内に前年秋に温度ロガーを設置した。その結果、5 月には雪が融けさえすれば、十分に植物が生育できる温度環境であることが

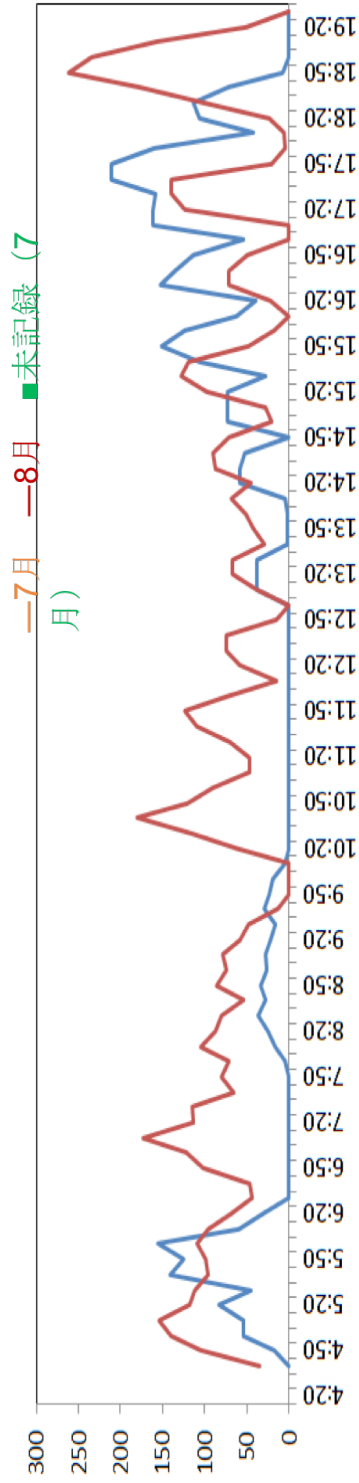


図1 10分あたりのついで回数の日変化。

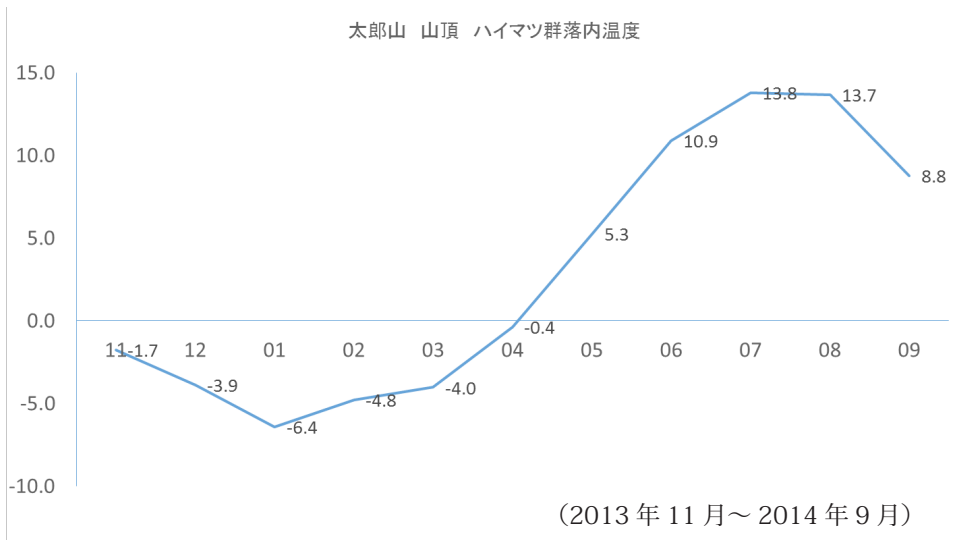


図2 太郎山のハイマツ群落内の温度の季節変化



図3 インターバルカメラで撮影したチングルマの開花

わかった (図2)。さらに、設置したインターバルカメラの画像解析から (図3)、雪が融けてからチングルマの開花までの有効積算温度 (205～228 °C) を算出することができた。このように環境情報から植物のフェノロジーを予

測する手法を確立することが可能となった。今後は、この手法を用いて、北アルプスの高山帯における長期モニタリングシステムを展開する予定である。

24th Pro Natura Fund Domestic Activity

Conservation studies of *Lagopus mutus japonicus* in the alpine regions
of Japanese Northern Alps

MARUTA Emiko, UENO Koru and OMURA Kensuke